

行く水に雲ゐの雁かりのかげみれば数かきとむる心地こころちこそすれ

鴨長明

『鴨長明集』収載、「雁をよめる」と詞書の添えられる一首。「川面に映る大空の雁の姿を見ると、流れゆく水に数を書き留めたような気持ちが出てくるよ」。

不思議な歌である。なぜ雁を詠んだ作であるのに、水に数を書くことに繋がるのか。この歌は『古今和歌集』の二首が下敷きになっている。

行く水に数かくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふなりけり
読み人知らず

「流れゆく水に数字を書くことよりもむなしく、無駄なことだ。自分のことを少しも思ってくれない相手に恋をするということは」。流水に数字を書くことは不可能なこと。「行く水に数かく」とはつまり、和歌においては儚いこと象徴なのである。

白雲に羽うちかはしとぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月



「闇夜では空を飛ぶ雁の姿を捉えることは難しい。月が明るいからこそ、雁の数さえ鮮やかに見える」。秋の夜の澄んで輝く月の美しさを讃える歌である。

読み人知らず

掲出歌に戻ろう。下鴨神社の禰宜の次男として生まれたのにも拘わらず、若くして後盾を失ったり、相統争いで敗れるなど不遇な体験を重ねてきた長明。下鴨神社の境内には、御手洗川、泉川、瀬見の小川など、行く水が溢れている。「行く水に数かく」、まさにそれは自分の人生に実感されていた感慨であった。秋の美しい月の映る川面に雁の影が横切った。不可能を可能に替えたいという瞬間的な祈りが、水に数を書き留めさせたのではなかったか。

『方丈記』の冒頭「ゆく川の流ればたえずして、しかももの水にあらず……」でも、長明はやはり俯いて、川面をじっと眺めている。優れた表現は孤独と向き合う心から生まれる。無理をして上を向いている必要はない。下を向くことよって、はじめて見つけることができる詩があるのだから。

(小島なお)